

群馬詩人クラブ 会報 No.301

編集／群馬詩人クラブ幹事会
代表／磯貝優子
発行／群馬詩人クラブ事務局
〒370-3504
北群馬郡榛東村広馬場1067-2
現代詩資料館「榛名まほろば」内
印刷 三協印刷
振替番号 00160-4-708314 中澤睦士

主な記事

- 詩誌は、いま⑩……………2
『杏』小野啓子
『ライラック』房内はるみ
- イベント報告……………3
あすなる忌 白井三夫
現代詩ゼミ 福田 誠
薔薇忌 寺内 拓
朔太郎忌 伊藤信一
- 追悼・島田千鶴さん……………6
小鮎美江……………6
- 幹事改選のお知らせ……………7
- 現代詩ライブ案内……………8
- 受贈詩誌御礼／編集後記……………8

薔薇と花野

—大手拓次生誕二三〇年に深謝をこめまして—

大手拓次研究会 代表 真下宏子

安中市磯部に生まれた詩人大手拓次を偲ぶ会「薔薇忌」が、今年二十回目を迎えました。ひとえに、拓次にお心を寄せ続けて下さる、皆々様のお陰様と深謝申し上げます。

大手拓次は、薔薇の詩を多く書き「薔薇の詩人」とも言われております。彼は、詩の創作の為のノートを「花野」と名づけました。彼は詩の創作を通して「真」への道を歩み続けました。

「薔薇」を「真」の表現と仮にとらえてみれば、薔薇をも含む「花野」は、「真」を表現する為に生き続けた拓次の「真」とも、とらえられましょうか。

拓次は「芸術は、(中略)文学も、(中略)いづれも魂の表現にほかなりません。」(大正7年9月21日午後)と、拓次を支え続けた親友の逸見享へつづつていきます。

拓次の魂の表現が、「真」の薔薇の一輪として花開くまで、冬の日も、夏の暑い日にもその根元を守り、そっと水を注ぎ続けていた人々がおりました。

拓次は、彼の祖母のことを次のように日記に記しております。

「いつもさうであるが祖母の事を思ふと、私は此世の中に愛の存在を確実に握りしめる事が出来る」(大正9年10月17日)

幼くして両親を失った拓次でしたが、彼を支え続けてくれる人々は、人生のその時々、そっと在り続けてくれたことと思われまます。拓次の死後、彼の初めての詩集刊行に尽力した親友の逸見享もその一人で在りました。

「薔薇」を拓次の姿と、仮にとらえてみれば、薔薇をも含む「花野」は、彼自身でもあり、彼と共に在り、彼を見守り続けた人々、そして、今もなお、見守り続けて下さる皆々様お一人お一人のお姿とも重なるように感じまます。

拓次は、すべての花々と共に風に吹かれながら空へのほつていったのかもしれない。空の上から見れば、求め続けた「真」の姿が青く澄んで、拓次自身もその一部として、光輝いて在り続けているのかもしれない。

時を越え、昔も今も、拓次を支え続けて下さる皆様お一人お一人の笑顔に、心からの感謝をささげたいと存じます。

拓次の「真」への道の旅は、私達の心の旅路となつて今を生きております。

朝露に眼を開く薔薇の香を、心からの感謝と共に聴きながら、「真」への道を、皆様とご一緒に一歩一歩、歩んでまいりたいと存じます。

すぎし日のばらの花(昭和8年5月17日)

すぎし日の 枝に咲く ばらのはな

そのにほひ すずろに とほく

ふかぶかと きゆるなし

詩誌は、いま—⑩

詩誌「杏」のこと

小野啓子

私が参加していた「沼田文学」と「ピオレータ」が終刊となり、しばらくして沼田文学で一緒にしたことのある方が、手作りの詩集を送ってくれました。その後、今度は同じ地区に住む同級生が、御主人が作ったという詩集を送ってくれました。どの会にも参加せず、個々で活動していることに心動かされ、三人で集まり話をしませんかと声を掛けました。初めての会合は三年前の二〇一四年三月でした。また次もという言葉で、毎月一回勉強会という形で集まることになりました。

まず大切なのはインプット。私の参加している会誌「夜明け」の詩や評論。県内の方々から頂いた詩誌や、個人で発行している会報等を参考にさせて頂き、皆で読み合い沢山の良い作品に触れさせて頂きました。

その後、会員の方が友人を誘い四名になりました。

会合場所に行きつけのお蕎麦屋さん。お店の人の理解とご協力で気兼ねなく話ができます。私の仕事が忙しくなる十月・十一月を除き、一年間勉強会を重ねました。

会員は、六十・七十代ですが、もっと勉強したい、今よりも良いものを書きたいという

意欲に溢れています。自分自身も視野を広げ成長したいという思いで意見を交わし合い、書き直しているうちに詩誌にまとめたという自然の成り行きで「杏」が誕生しました。

皆の事情を汲み、一年に一度の発刊というスタイルを取り、今三号へと向かっています。皆遠くには行けないけれど、この沼田なら月一回でも集まる事が出来るし、楽しいのでこれからも続けたい。そんな仲間の声に励まされています。

少人数の会ですが、大きな災害や事件・事故による人の苦しみ悲しみに心を寄せたり、自分の身近で起こること、動植物にも目を向けていきたいし、同じテーマで書いてみるのも面白く、色々なことに挑戦していきたいと考えています。

「ライラック」によせて 房内はるみ

この原稿の依頼を受けた時は、驚きと同時に懐かしさがこぼれてきました。それは東日本大震災のあった年、何度か訪れている仙台についてのエッセイを書いたのを最後に六年間も休刊していたからです。

この個人誌をはじめたきっかけは、県内で同世代の人が少なかったこと。県外で詩を書いていて主として女性で個人誌を出している方や、こんな人とお友達になりたいと思っ

ている方を中心に通っていました。創刊は二〇〇八年で、詩が二編、「エッセイ詩」「つれづれなるままに」が収められています。

ここで「エッセイ詩」という奇妙なものにふれさせて頂きたいと思います。これは朔太郎が散文詩の序文の中で書いている言葉を用いたものです。それによると、散文詩は観念的、思想的な要素が多く、散文詩を思想詩、またはエッセイ詩と呼ぶことができると思う、としています。主として「田舎の時計」や「死なない蝟」「郵便局」などが収められています。私としてはエッセイのなかに詩のエキスを入れたものとして書きました。

一号では「さまざまな場所」と題して、蚕糸記念館、図書館、空き地、駅舎、調剤薬局。二号では「さまざまな動作」と題して、拭く、花を育てる、カーテンをしめる。三号では「ものたち」と題して、スプーン、枕。六号では「初夏の一日」と題して、夜明け、真昼、夕暮れを書きました。反応は賛否両論でした。おもしろい発想だから続けたほうがよいという意見と、やはりエッセイと詩は別のものであるからおかしいというものでした。

それはともかく、私のようなものが、恐らく多くも朔太郎の真似をするなんて、今では深く恥じ入っております。

体調不調で六年間何も書けませんでした、忘れずにいてくださる方がいて、嬉しいかぎりです。

イベント報告

第一六回あすなる忌に参加して

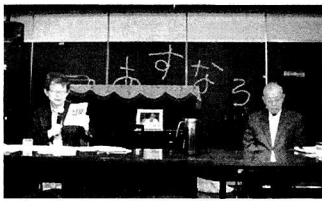
白井三夫

二〇一七年四月九日、私の住む渋川市ではまだ三分咲きだった桜も、高崎に近づくにつれて満開になり、午前中の雨も上がり、高崎市役所近くの広場では、大勢の人が集まりイベントが開催されていた。

私はあすなる忌に参加するのは三回目で、崔華國さんとの面識もなく、伝説の詩人としての知識程度しか持ち合わせていない。

会は、曾根ヨシさんが体調を崩して不在のため、志村喜代子さんのあいさつで始まった。藤井浩さんが、今年は崔華國さんの没後二十年目にあたること、また新聞の切り抜きを持って朔太郎記念館が移設になり、今日から公開が始まることに触れた後に、ゲストの細田傳造さんの紹介を川島完さんが行った。

細田さんは、一九四三年東京生まれの在



日二世。六十五歳から詩を書き始め二〇一二年に出された第一詩集『谷間の百合』で第一八回中原中也賞、二〇一五年の第三詩集『水たまり』で第二二回丸山薫賞を受賞している。元気のいいユーモアセンスのある詩人だ。

今回のテーマは「崔華國と金素雲」を語る

という。藤井さんが聞き手で、細田さんが答える。金さんは、死の直前に書いた文章で「自らを祖国でも、またよその国でも、定着とすることを知らずに過ごしてきた人生。転がる石には苔が付かぬとは言うけれど、私は自分自身の持ち物を、どれ一つとして大事にし、尊重したことはなかった」と言っている。一九〇八年、釜山・絶影島に生まれ、一二歳で日本へ密航。二十歳で出版した『朝鮮民話集』が北原白秋に絶賛され、詩人として立つ。一九三七年朝鮮人ゆえ、予防検束的に検挙され、半年間大森署に勾留される。戦時中は主として日本で童話集や歴史物語などを出版する。

最後に詩の朗読があった。中でも、平方雪子さんの金素雲の『朝鮮民話集』から『ネギを植えた人』の暗唱は、感動を与えてくれた。人が人を食べないために、ねぎを植える。この民話の意味を重く受けとめたいと思った。

関口将夫さんから、来年のあすなる忌についての希望が語られた。私のようなよそ者にとっては、崔華國さんのような特異な人物が生きていた高崎の街、死語二十年たつてもこのように多くの人に影響をあたえ続けていることを、うらやましく思う。群馬は詩人が多く生まれ、大手拓次をしのぶ「薔薇忌」が二十回、「朔太郎忌」が四十五回目を迎えている。残念ながら、私の生まれた故郷にはない。願わくば若者に引き継ぎがうまくいくように祈るばかりだ。

現代詩ゼミの報告

福田 誠

高崎市でも最高気温が夏日となった四月十六日（日）、高崎現代詩の会の総会と現代詩ゼミが高崎中央公民館で開催されました。その概要を報告します。

講師は樋口武二さん。演題は『グズグズと詩のことなど』。参加者は、会員十四名、会員外四名の計十八名でした。詩に関する講演の主旨を、参加しなかった人に報告するのは難しいことでもあります。講師と参加者で共有した価値観や、臨場感を説明するのは並大抵のことではありません。そこで先ず、樋口さんのレジメの項目を紹介します。①雑誌を発行するということはどういうことなのか、②いまの時代にあつて（モノを書く）という行為は何を意味するか③どのように時代と向き合うのか④私というものは、いったい何者なのか⑤作品には〈物語性〉が求められている。付録・散文で詩を書くことは『となりません。どうですか、少しは伝わりませんでしたでしょうか？

次に小生のメモの一節を紹介します。全体を説明するものではなく、講師の話し言葉の一部分をメモとして切り取ったものです。

『詩という弁当箱に何を入れようか、と入れる。入れ物さえない中で詩を書いて行かないといけない。言葉を泳がす。こういうものが

詩、詩はこうであると定義すると、言葉が不自由となる。決まった器に詰め込むのではなく、言葉解き放つ。日常の中の「私」から構築するのが一番「楽」なのだが、本来の「私」とは遠い位置になってしまふ。本来の自分を意識の下に押し隠し、本来の「私」に巡り会うための旅が「詩を書くということ」。感性。新しく自分の中から生まれる「私」。自己探求すると引き返せなくなってしまう。日常とどう折り合いをつけるか。』どうですか、少しは伝わりましたでしょうか？混乱が深まっていますか？

自分自身をストイックに掘り下げないと詩は書けない、詩人は自身と向き合うための旅をしているのだ、ということ再認識した日でした。

残りの紙面では現代詩ゼミの歴史について記します。一九九四年四月梁瀬和男氏を講師に招いてから今回で25回目のゼミとなりました。ゼミの講師はぜんぶで二十一名（四名の方が二度）。梁瀬氏以降の講師名を敬称略で順に記します。真下章、大橋政人、久保田穰、梁瀬和男②、宮崎清、真下章②、小山和郎、川島完、曾根ヨシ、富沢智、石山幸弘、大橋政人②、野口武久、久保田穰②、佐藤正子、新延拳、岡田芳保、本郷武夫、田口三船、大塚史朗、愛敬浩一、真下宏子、國峰照子（氏名の次の②は二度目の方です）。鬼籍となられた方もあり、つくづく歴史を感じます。

第二十回 大手拓次をしのぶ会

「薔薇忌」 寺内 拓

四月二十三日（日）、前日の風もおさまつて晴れ渡り、会場の駐車場に咲く八重桜が満開の、今年が生誕百三十年の節目にあたる、第二十回大手拓次をしのぶ会の「薔薇忌」が行われた。

最初に会場の磯部温泉会館からほど近い、大手家の拓次の墓で墓前祭が行われ、主催者の挨拶のあと地元の小中学生による拓次の詩が朗読された。続いて参加のみなさんひとりひとりが、薔薇の花を献花して墓前に手を合わせ、拓次の霊に話しかけたのである。

その後、磯部温泉会館に移り、第二回大手拓次賞の授賞式が行われた。大手拓次研究会代表の眞下宏子氏の挨拶に続き、安中市長の茂木英子氏の来賓の挨拶があった。

今回の受賞作は、大手拓次賞に

「薔薇に眠る」月森 葵（東京都）

佳作・安中市長賞に

「薔薇になる」墨原志乃（滋賀県）

佳作

「冬の薔薇」内田範子（群馬県）

の各氏であった。そして受賞者がそれぞれ順番に受賞作品を朗読し、喜びのコメントを披露した。拓次賞に輝いた月森氏の「薔薇に眠る」の最終連を引く。

目の眩むほど鮮やかな虹色の薔薇は

砕け散った玻璃を溶かさんばかりに
噎せ返るほど甘く それは甘く匂い立ち
醒めることのない夢を
いつまでもいつまでも
繰り返している

つづいて、「孤独の箱のなからから、大手拓次の詩作」という演題で、群馬県立土屋文明記念文学館の学芸主幹である佐藤直樹氏の講演があった。

大手拓次が詩壇に登場する「藍色の墓」から晩年までを時系列に丁寧拓次の詩をほさみながら講演をされた。

そして最後に薔薇のケーキを戴きながら自由に楽しく懇談し、閉会した。

大手拓次は二三八編もの詩を作りながら生前詩集を出すことは出来なかった。詩集が出版されたのは没後二年八月あつたのである。

薔薇忌のあと筆者は「藍色の墓」の初版本を手にとってみたいと思つた。数日後、叶う事ができた。ずっしり手ごたえのある二百五十五編の詩、北原白秋の序文、萩原朔太郎の跋文、表紙にサボテンの版画絵、裏表紙には薔薇、背表紙の下に蛇の絵、筆者は手に取つた瞬間、底知れぬ感動に襲われたのである。



第四五回朔太郎忌

『月に吠える』刊行百年

どこがヤバイの？ 朔太郎

5月14日(日) 前橋アルサホール

伊藤 信一

今年の朔太郎忌は、第一部が『月に吠える』とは何だったのかー日本詩歌の百年』と題したシンポジウム、第二部が『月に吠える』を声で立ち上がらせる』リーディングシアターの、二部構成で開催された。会場のテルサホールは五百円の当日券が完売、入場できなかつた人もいたという大盛況。

第一部は、小説家の高橋源一郎氏、歌人の穂村弘氏の二人を迎えて、朔太郎研究会会長で詩人、小説家の松浦寿輝氏の進行で始まった。



高橋氏は、『月に吠える』の特異なオノマトペや、初版時に検閲により削除された「恋を恋する人」などから浮かび上がる、聞き耳をたて、世界から言葉拾い、他人に触られる朔太郎の受動性に、『青猫』につながる表現の可能性を感じ、読

み返してその点にひかれた、小説家と異なり詩人は新しい形式を発見する人で、特に朔太郎は一回一回冒険している、などと語った。

穂村氏は、短歌や文語定型詩は作品の外側にスタイルがあるが、朔太郎が確立したとされる口語自由詩は、スタイルが作品の内部にあり、魂と言葉が直結している、あらかじめスタイルがあるということを否定したのが朔太郎の新しさではないか、口語か文語かは本質的ではなく、『氷鳥』も文語を『月に吠える』より増やしただけなのではないか、などと発言した。

松浦氏は二人の話を受け、朔太郎は小説も書き、短歌のアンソロジーを編み、評論も書いた全体的な文人だった、詩は一編ごとに暗闇に向かつての跳躍であるが、『月に吠える』の中に同じような詩がないのがすごい、勇気づけてくれる天才的詩人で、読むたびに新しい魅力が発見できる、と締めくくった。

第二部は、朔太郎の孫で前橋文学館館長萩原朔美氏と俳優、ナレーターによる朗読劇。現代の高校生が授業での発表のために『月に吠える』について調べる中で朔太郎にひかれていくというストーリーと、朔太郎、犀星、白秋、の書簡朗読、『月に吠える』からの作品朗読が組み合わされた、意欲的なプログラムであった。

著名な三人の文学者の組み合わせへの期待もあつてか、文学イベントとしては希有な約五百名の聴衆の中、熱気に満ちた二時間半だった。

お知らせ

本年度の群馬詩人クラブの総会は、11月25日(土)に開催予定です。会場は、昨年度と同じ前橋テルサ9F赤城の間。総会後の講演は、三好達治賞を受賞された大橋政人さんの記念講演を予定しています。詳細は、次号会報でお知らせいたします。

訃報

会員の島田千鶴さんが、四月七日ご逝去されました。心よりお悔やみ申し上げます。

◆お詫びと訂正

会報300号2ページ、飯田光子さんの「コレも詩誌なのかしら」の中に誤りがありました。訂正してお詫びいたします。

誤 羽生楨子さん
正 羽生楨子さん

前橋文学館にて以下の展覧会が開催されます。詳細は前橋文学館にお問い合わせください。

◆企画展「月に吠えらんねえ」展

7月8日(土)～10月9日(月)

3階オーブンギャラリー

◆特別企画展「月に吠える」100年展

7月22日(土)～10月9日(月)

2階展示室

お問い合わせ／萩原朔太郎記念・水と緑と

詩のまち前橋文学館

電話 027-235-8011

桜の花の下 島田千鶴さん逝く

小鮎美江

「四月七日母島田千鶴儀天寿を全うしました。」と、ご息からのお葉書。介護施設に入られた事を知り案じていた矢先の訃報だった。

島田さんは早くから「詩学研究会」に投稿して嵯峨信之氏に認められ推薦詩人になったという。「嵯峨さんを御案内して岡田刀水士先生のお墓参りに行った」と島田さんに聞いた。その頃の島田さんを私は知らなかった。「歷程」詩人の草津詩のフェスティバルではじめてお会いしてから時々電話を頂いたり話し合うようになった。

島田さんは自我の確立した個性的な人だった。自説を曲げない人だった。フラメンコや地唄舞を本格的に習われ、発表会を見に行ったことがある。

「軌道」の同人として長く詩を書かれていた。その後「裳」「水鏡」に作品を寄せられた。詩への思いが深く、いつも編集者を困らせるほど遅筆だったという。

その頃からよく旅をするようになった。北海道や東北、海外へも何度も行かれたようだ。「旅は詩を書くため」と言ったが所謂旅行詩は書かなかった。旅で得たものを詩の中に独特の感性で同化させた世界を描いて見せた。「私は不器用な人間だから」と言った。

「夫にはよい妻を演じて盡している」とも。

一人息子さんにはやさしい母。前橋の営林局まで二時間の勤めを定年まで続けた働く女性。そのどれも決して混同しなかった。しかし器用に演じ分けるのではなく、一つ一つ懸命に盡したのかもしれない。島田さんにとつて詩人島田千鶴がほんとうの自分だったのだ。

晩年緑内障で視力が不自由になり年刊詩集No.35の「吊り手物語」は金井裕美子さんが口述筆記したという。その年(二〇一二)の詩人クラブ総会に出席されたのが最後となった。長い詩歴の中、詩集は「水のない川」と「パンケーキ・アイス」の二冊。詩集を出したいと言っていたが叶わなかった。施設に入られてからも詩を書きたいと、裏の白い広告紙を何枚もボードに留め紐で結びつけたマジックペンで書こうとしたらしい。

佐藤恵子さんと神保武子さんがお線香を上げに伺った時、ご息が見せて下さったボードの一番上の一枚にだけ、太いマジックペンの紙いっばいの大きな字で

「オランダの森から／どの道に来て

この草原へ／たどりついたのだろう」と

と四行の詩が書かれていたという。この詩が島田さんの絶筆となった。最後まで詩人だった島田千鶴さんの心情と美学が切々と伝わってくる。桜の咲く季節に旅立った島田さん。お葬式には田口三船さんと富沢智さんが来て下さったと、ご息が感謝された。

さようなら島田さん。
淋しい春です。

年刊詩集第四十集

原稿募集

締切日 七月三十一日(日) 必着

参加費 会員 5000円
会員外 5500円

*但し、二頁を超える作品は、いずれの場合も一頁あたり2000円の追加となります。

形式 見開き二頁(40字×40行)を基本

とし、最初の五行は表題・作者名。行数オーバーの場合追加料金となりますのでご注意ください。

発行 十一月発行

配布 平成二十九年度総会にて(2部)

*当日欠席で郵送を希望する方は、参加費に送料500円を加算して振り込んでください。

参加費振込先 郵便振替で左記へ。

口座番号 00110151655622

口座名義 斉藤 守弘

*振り込み手数料は自己負担となります。

*年刊詩集分〇〇円・郵送料500円と明記のこと。

振込期限 十一月十日まで

原稿送付先 郵送・FAX・メールで受付

郵送

〒370-3504 北群馬郡榛東村広馬場1067-2

現代詩資料館「榛名まほろば」内 群馬詩人クラブ事務局

FAX 027915510665

メール harunamahoroba@nifty.com

*原稿はコピーをとっておいってください。

富沢 智

幹事改選のお知らせ

次期、群馬詩人クラブの幹事改選を行いますので、次の要領で投票をお願いします。

一、選挙人および被選挙人は、群馬詩人クラブの会員であること。

ただし、現在の幹事は被選挙人とはなりませんので、現幹事への投票は無効となります。ご注意ください。

一、候補者は五名連記、選挙人は無記名とします。

一、投票締め切りは七月十日(月)必着でお願いします。

一、投票は同封の所定ハガキに限ります。

現役幹事

磯貝 優子	井上 敬二	内田 範子
金井 治子	金井裕美子	斉藤 守弘
佐伯 圭	関根由美子	富沢 智
中澤 睦士		

現役幹事を除く会員

鈴木 恵子	鈴木 陽子	須田 和子	山本 典子	若宮ひとみ	愛敬 浩一	新井 啓子	荒井 哲夫	須田 芳枝	関 和郎	関口 将夫
城田 博己	新貝 征義	神保 武子	梁瀬 和男	山田 弘子	飯田 光子	石田 洋	泉 麻里	関谷 隆	曾根 ヨシ	高田 芙美
芝根 南	清水 由実	志村喜代子	宮前利保子	森ノ坂一詠	伊藤 信一	井上 英明	宇佐見俊子	高橋 克彦	田口 三船	田中 良三
佐鳥 吉美	篠木登志枝	芝 基紘	水野 有人	三方 克	白井 三夫	浦野 理子	江尻 潔	田村 雅之	千明 政夫	塚越 祐佳
提箸 宏	佐藤 恵子	佐藤 慈	松田 孝夫	松本 茂晴	大館 光子	大塚 史朗	大橋 政人	堤 美代	鶴田 初江	寺内 拓
斎藤 晋	斎藤 祐史	三枝 治	ほかりきよかず	堀江 泰壽	小嶋 明子	小鮎 美江	齋藤加珠子	福田 尚美	福田 誠	房内はるみ
川島 完	上林 忠夫	剣持 昭義	原田 鰐	樋口 武二	神尾 敏之	柄澤 絢子	川島 清	長谷川安衛	原健 十三	原田 道子
片山 壹晴	金子 久枝	狩野 務	中野 和彦	野口 直紀	小野 啓子	小保方 清	笠原真理子	時澤 博	長岡 莊三	中島 光彦
小野 啓子	小保方 清	笠原真理子	中野 和彦	野口 直紀	片山 壹晴	金子 久枝	狩野 務	中野 和彦	野口 直紀	萩原 正夫
神尾 敏之	柄澤 絢子	川島 清	長谷川安衛	原健 十三	川島 完	上林 忠夫	剣持 昭義	原田 鰐	樋口 武二	平野 秀哉
斎藤 晋	斎藤 祐史	三枝 治	ほかりきよかず	堀江 泰壽	小嶋 明子	小鮎 美江	齋藤加珠子	福田 尚美	福田 誠	房内はるみ
提箸 宏	佐藤 恵子	佐藤 慈	松田 孝夫	松本 茂晴	佐鳥 吉美	篠木登志枝	芝 基紘	水野 有人	三方 克	宮崎 潤一
芝根 南	清水 由実	志村喜代子	宮前利保子	森ノ坂一詠	城田 博己	新貝 征義	神保 武子	梁瀬 和男	山田 弘子	山田八重子
鈴木 恵子	鈴木 陽子	須田 和子	山本 典子	若宮ひとみ	鈴木 陽子	須田 和子	山本 典子	若宮ひとみ		

第二十五回 群馬詩人クラブ 「現代詩ライブ」参加のお願い

1. 日時

二〇一七年七月二日(土)
開場 11:00 受付 13:00 開演 14:00
懇親会 16:30

2. 会場

榛名まほろば(榛東村広馬場1067-2)

3. テーマ

「見る詩、聞く詩、奏でる詩 II」

4. 内容

「テーマに沿った自作詩の朗読や、詩画作品を使った語り、その他新たな表現などをお気軽に…」

5. 参加方法

七月一〇日(月)までに参加・不参加を会報同封のハガキにてご返送お願いします。当日の飛び入も歓迎いたします。

6. 参加費

朗読ライブ500円(フリードリンク)
懇親会は別途2,000円です

7. 連絡先

群馬詩人クラブ事務局(榛名まほろば)

TEL 0279-55-0665

受贈誌御礼

*ご惠贈感謝します。

- 『17 福島県現代詩集』 福島現代詩人会
- 『三重県詩人集 VOL25』 三重県詩人クラブ
- 現代京都詩話会誌『呼吸』 142
- 『2016年刊詩集』 徳島現代詩協会
- 『年刊詩集 ふくく』 2016 福井県詩人懇話会
- 『千葉県詩集 第49集』 千葉県詩人クラブ
- 『香川県詩集 第20集』 香川県詩人協会
- 『島根年刊詩集 第45集』 島根県詩人連合
- 『宮城の現代詩 2016』 宮城県詩人会
- 『GIFU詩人集 第4号』 岐阜県詩人会
- 『ひよこ』現代詩集 2016 兵庫県現代詩協会
- 『中日詩人集 56』 中日詩人会
- 『関西詩人協会自選詩集 第8集』
- 『鹿児島県詩集 第二十集』 鹿児島県詩人協会
- 『秋田県現代詩年鑑 2017』 秋田県現代詩人協会
- 詩界通信・日本詩人クラブ広報 78
- 日本現代詩人会報 143・144・145
- 萩原朔太郎研究会会報・SAKU 82・新装3
- 長野県詩人協会会報 135
- 静岡県詩人 130 静岡県詩人会
- 北海道詩人・北海道詩人協会報 142
- 大分県詩人協会会報 147・148
- 福岡県詩人協会会報 166・167
- 福井県詩人懇話会会報 93・94
- 鳥根県詩人連合会報 81
- 関西詩人協会会報 83・84・85
- 埼玉詩人会会報 81
- 中日詩人会会報 188
- いちご通信(大分県詩人連盟会報) 第16号
- 岡山県詩人協会だより 19
- いしかわ詩人・石川詩人会会報 43号

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

秋田県現代詩人協会会報 第55号
 岐阜県詩人会会報 第8号
 中四国詩人会ニューズレター 第41号
 宮城県詩人会会報 第24号
 兵庫現代詩協会会報 40号
 とつとり詩人・鳥取県現代詩人協会会報 第36号
 ミニコミ誌「裸心版」2017年3月28日号
 『阿房草』36
 (五月末日現在 敬称略)

値上げの6月になった。タイヤ、バッテリー、電気・ガス料金、そしてハガキも62円に。個人的には、これまでも50円切手の下に2円切手を貼って出すことがあったが、10円切手を加え3枚並べることになるのだろうか。それにしても約20%の値上げは大きい。物価上昇目標2%の日銀目標が、全く達成できない状況が続いている。だが、そもそも物価は恒常的に上がり続けるべきものなのか? 上がったりがつたりはあっても、長い目で見て横ばいではないのか? 「持続可能な発展」と言うが、「発展」という言葉自体、衣の下に「成長志向」の鎧が見え隠れしていないか? 一庶民、一主夫として、そう思う。

会報今号には、ハガキが2枚同封されています。「現代詩ライブ参加申し込みハガキ」と「幹事改選投票ハガキ」。どちらも有効に活用いただきたく、お願いいたします。

(佐伯)